

エンカウンター (ENCOUNTER)

第231号

2021年7月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助『コリント人への第一の手紙 講解説教』より (1)

小西芳之助著『コリント人への第一の手紙 講解説教』は、2003年(平成3年)5月、高円寺家庭集会(代表石館基)によって発行された。元になった聖書講解は、1963年(昭和38年)及び1973年(昭和48年)に行われたが、本書は、第2回目の講解説教の録音テープを起こしたものが中心になっている。2回目の講解説教では、10年前の説教を前座として聞いて、10年後の感想を追加している。

第1講 コリント前書について

聖書の注解説教のみを行う理由

ご承知の通り、説教には、聖書の講解説教をする場合と、聖書の特定の箇所を選び、自分の経験を通して、自分の考えを説教する場合とに大別されると思います。教会によって、また、先生によって違いますが、私の先生である内村先生は聖書の講解説教をされました。その意味を考えてみますと、キリスト教の真理の源というか、その拠って来るところは、聖書にあります。この聖書を学ぶ理由は、我々が自分の経験を通して語ります時には、我流になる恐れがある。例えば、ロマ書で詳しく学びましたように、聖書でいうところの「信・望・愛」の内容は、我々、生まれつきのもものが思っているそれと大分違います。それは、自分のいい加減な経験と自分の独りよがりな考えで述べるべき内容では

ありません。先生と言えども、色々な先生がおりますが、偏った先生が多い。聖書全体の意味を把握しているという先生は非常に少ないと見てよいと思います。私は、ここで他の先生を批判するわけではありません。大体において、人間の真理の把握と言うものは、ほんの一部分にしか過ぎないということを申し上げているのです。たとい、大先生に話を聞きましても、我々の理解は部分的であり、偏っている場合が多くあります。我々の聖書の理解は、聖書全体が主張している真理からかなり離れています。部分は全体より小さい。従って、我々には、聖書を学ぶことがどうしても必要になってきます。聖書はどのようなことを言っているか。ロマ書には、「信・望・愛」は永遠に残ると書いてありますが、それらについては、我々の理解たるや、皆低調な理解をしています。これが聖書を学ぶ一つの理由であります。

聖書の注解説教のみを行う理由 (2)

第2の理由は、同じこととなりますが、聖書を学んで来ますと、だんだん聖書全体が主張していることが明らかになって来るからであります。例えば、マタイ伝に言いあらわされているが、我々にとっては十分に理解できない内容は、ルカ伝あるいはヨハネ伝を読んで初めて理解する事が出来る場合があります。聖書は、いずれの部分においても全体を説明しているにかかわらず、我々にとっては、それが部分的にしか見えて来ない。我々は、自分に都合の良い場所のみが見えて、その外のところは隠れています。内村先生は、まず、パウロの手紙をよく勉強してから、4福音書を読むように、と言われました。各論が分かって来ると全体が分かってきます。先生は、旧約のヨブ記、ダニエル書、それからロマ書を勉強され、それから次に福音書に入られました。私も、先生になり、聖書全体の真理を知るために、ロマ書の研究の準備として、他の書簡を学ぶことにしました。

キリスト教と言っても、旧教あり、新教あり、また、新教も、多くの分派に分かれています。……信仰、信仰、と言っておりますが、本当に我々の理性を動かさねば、それは消えてしまいます。どんな熱心さがあっても、本当に我々の知恵を動かしていない場合は、その人の信仰は消えてしまいます。これが、私が聖書注解の説教を行っている理由であります。

コリント前書の内容 (大観)

当時のコリントの状態

当時のコリントの状態は、BC146年、モンミウスという人により、全く破壊されました。その後、100年ほどして、有名なシーザーの手で再建され、ローマの植民地として、総督が置かれました。そしてアカヤ州の首都として栄えました。コリント市は、東西交通の要路にあたり、人口は60万の大商業都市であり、学術文芸（特に、哲学の分野）も発達していました。運動競技も盛んに行なわれておりました。有名な偶像のアフロディテの神殿もあります。そこには、1000人ほどの醜業婦がいたそうですので、町は淫風の絶えないほど乱れていたと想像されます。当時のキリスト者もその影響を受けざるを得なかった。当時、「コリントの如くする」という諺があったそうです。また、一方「凡ての人がコリントへ行けるものではない」という諺も有りました。コリント市は非常によい場所であり、富と学問において享樂の地であったためと思われます。これは富と文芸が盛んであっても、必ずしも人間はよくなる、道徳的にはなれない、というよい例であります。もし、現在の東京がコリントの如く裕福になりましたら、学問の中心でありながら、道徳の乱れた都市になるのではないかと思います。

パウロとコリント教会の関係

パウロとコリント教会の関係については、……第2回目の伝道（紀元50年ごろ）の時、パウロはアテネからコリントに来ました。これからその記事を学びますが、その時のパウロは、恐れて、実に弱々しく見えたと書かれています。それは、アテネで失敗しておりましたから。パウロのような自分の福音に確信を持っていても、福音を説くのに弱々しく恐れおののいたと書いてあります。これは何も福音だけではありません。我々、人生に立ち向かうときに、恐れおののき、弱々しく見えることを恐れる必要はありません。パウロは信者のアクラ、プリスカ夫妻の家に留まり、そこで、天幕工として自活しながら、伝道をしておりました。始めはユダヤ人の会堂で説教しましたが、ユダヤ人の反感を受けて、その後は、改宗者ユストの家で1年半ほど伝道続けました。当時の住民の半分は奴隷でした。その頃の奴隷は、労働者という意味ではなく、戦争で捕虜となった者を含んでいましたので、その中には、学者あり、医者あり、その他の優秀な人々がいました。そのため、奴隷の主人よりも優れた業務能力を持つ者もおりました。そこで、パウロはコリント教会を設立しました。

コリント前書——実際上の生活の問題

コリント前書は、第3回の伝道でエペソに3年間滞在した折にエペソからコリント教会の信者にあてて書いた手紙であります（紀元55, 6年の頃）。第1回目の手紙は紛失しているので、これが、第2回目の手紙のようではありません。1900年前の手紙が、今こうして我々の人生の指針として迫るということは誠に不思議なことでもあります。

この書簡を書いた理由は、コリントの信者から書面上の質問に答えるためです。またコリント教会で起こっている種々の分争、分離状態を聞き、それを憂慮して、分かれてはいけないと、始めの4章を使って書きました。その他は質問してきた問題、即ち、結婚問題、肉の問題、聖餐式の問題、あるいは霊の賜物の問題、最後に復活の問題など、実際生活上の問題についての解決法を諄々と説明いたしました。

コリント前書の特徴は、ロマ書のように、キリスト教の教理につき、規則正しく書いたものではありません。しかし、そこに示された方法は、キリスト教の原理「信・望・愛」を根底とした根本的な解決法が書かれています。教会や信者の実際的諸問題について、このように教えた書は他になく、聖書中で、誠に独特な価値を持っています。……従って、これは、ロマ書の後編、完結編と見てもよろしい。実際問題に当てはめたらどうなるかが書いてあります。

コリント前書第 13 章「愛」、第 15 章「復活」

コリント前書の 13 章は、「愛の章」として有名であります。クリスチャンの多くは、キリスト教は理論ではなく「愛の行い」であると言いますが、そういう「愛」とは違います。この「愛」はパウロの透徹した理性から築かれた「愛」であります。13 章で学びますけれども、我々の理性をも本当に動かすものでなければ、永続的な力を持ちません。

また、第 15 章の「復活論」は、実際問題を解いたこの本の最後として書かれています。これは、誠に注目すべきことであります。もしも、この「復活論」がなかったならば、救いの完成である「復活」の内容が不明となり、キリスト教の喜びと力の源がぼやけてしまいます。キリスト教の頂点はこの「復活」に尽きる。そして、この復活のことについて明快に説明したのは、このコリント前書 15 章だけです。新約、旧約聖書のどこを探しても、「復活」についてこれほど明快に書かれた箇所はありません。もしも、このコリント前書第 15 章がなかったならば、キリスト教の教えはあいまいとなり、他の宗教とあまり変わりが無くなってしまいます。極めて重要です。

ロマ書は「信仰」、コリント前書は「愛と望み」

ロマ書は「信仰」について論じておりますが、コリント前書は「愛と望み」について論じています。諸君、「信・望・愛」を軽々しく口にしないでほしい。「信仰」を論ずるには、ロマ書が分からなければ駄目です。「愛と望み」を論ずるには、少なくともコリント前書が分からなければ駄目であります。ちょうど、英語の「th」の発音と同じです。ただ「ス」といっただけではわかりません。どうしても舌を上あごにつけて歯をかみしめて発音する必要があります。それと同じく、キリスト教において「信・望・愛」を論ずるためには、どうしてもロマ書とコリント前書が分からなければ、そんな信仰は吹いたら直ぐに飛んで行ってしまいます。これを根底に置いたときに、死も恐れない、そういう力が出てきます。

10年後の感想

コリント前書とロマ書の比較

コリント前書とロマ書とを比較しますと、10年前には、ロマ書は教理を主とするが、コリント前書は、教理ではなく、我々の生活の実際問題について語られている、と言いました。しかし、そうではない。コリント前書にも教理は厳然として、十分含まれています。特に15章においては、「復活論」が出ております。この復活論は、パウロの中心的教理であります。従って10年前の見方は浅かったと思います。また、特に13章では、「愛」に関する根本的な教理が出て来ています。「愛」は我々の考えるような愛とは全く異なることが書かれています。「復活論」はパウロ神学の中心であるのみならず、キリスト教神学の中心問題であります。キリスト教の「救い」とはどういうことかということ、我々は復活する命を持っている、ということです。これは、何遍も申し上げていることですが、未だに、この「救い」が分からない人がいます。50年、70年生きているうちに、キリストと同じ永遠無限の栄光の体を授かる、そういう命を我々が持っている。これを「救い」というのであります。このことを最も明瞭にしたのは聖パウロです。この基本定理が分からなければ、人生における応用問題は解けるはずはありません。

「天国は言葉にあらず、力である」

度々いうように、浄土宗では、阿弥陀仏が救い主であり、その救いの方法をわが国で初めて明らかにしたのは、法然上人です。日本では法然が浄土宗の元祖です。キリスト教では、救い主はイエス・キリスト（神、聖霊と共に三位一体）です。そして元祖はパウロであります。パウロがイエス・キリストをどのように受け止めるかという方法を初めて説明しました。特に、ロマ書において最も明瞭に説明しました。イエスは救いの製造者であります。

我々はイエスの真似は出来ません。「impossible」であります。クリスチャンとは、救われて出来るだけイエスの真似をする者をいいます。我々はパウロによってキリスト教を学びます。我々は「復活」する道を頂いたときに、この世において力が出てきます。パウロは「力」という言葉が好きでした。パウロは「君らの善をなす力を見せてもらいたい」と言いました。また、「天国は言葉にあらず、力である」とも言いました。力の無いようなクリスチャンは辞めて下さい。教会に来るより、家で寝ていた方がよろしい。「力」は「復活の望み」から来ます。この望みを持つ時に、我々に恐るべきものがなくなります。貧乏が怖いですか。病気が怖いですか。我々は生活のことは心配要りません。誠実に働いていれば、それでよい。金を貯める代わりに復活の信仰をためて下さい。この「復活」についてはこのコリント前書が説明します。

啓示と信仰

最後に、啓示と信仰について述べたいと思います。この「復活」の知恵は神から人に賜った「啓示」であります。人間の知恵をもってしては分かりません。我々の知恵を超えています。3次元にあらず、これは4次元であります。神がパウロに啓示しました。信仰、即ち、それを本当であると信じる。これで「復活」の真理、命を頂くのであります。信仰は「意思の力」です。人間の知恵で行けないところは、この「意思」で行く。現在のわれわれにはこの意思の訓練が足りません。学校で、この意思の訓練を教えてくれるところはありません。家庭でもそれがない。子供をほったらかしにして、思い通りにさせています。人間が動物と違う尊いところは、感情があり、この意思があるところです。我々の祖先には、現代のような意志薄弱なところはありませんでした。現代の若い者は、ほんの苦しみに会ったら、すぐへこたれてしまう。もう少し意思の管理が必要です。この信仰理論は理性で分かりません。パウロははじめの3章で、この理論を説明しています。我々はもっと真剣に聖書講義を聞く必要があります。